

# 第二言語使用における慣用句の回避現象

## —第一言語慣用句との類似度に着目して—

陳 雯

### 要 旨

慣用句研究において、第二言語学習者による使用回避の問題はいくつかの研究において取り上げられている。先行研究は学習者の第一言語との類似度、慣用句の透明度(文字通りの意味と全体の意味との関連性)、慣用句の認知度といった観点から議論を行っているが、第一言語との類似度の違いによって慣用句の産出率が異なるという結果が見られた一方、慣用句というカテゴリ全体の回避現象は発見できなかった(Irujo 1993; Laufer 2000)。本稿では、中国人上級日本語学習者を対象に、四肢選択問題をテストに採用し、慣用句の認知度を確認した上で、慣用句の回避現象について検討を行った。結果として、第一言語との類似度が慣用句の産出に影響しないことが分かり、日本語学習者と母語話者の間に慣用句産出の差は見られなかった。それに対して、認知度調査から分かった学習者の慣用句認知度が産出に影響を与えることが検証された。

### キーワード

慣用句 第二言語習得 回避 第一言語との類似度 認知度

## 1 はじめに

Schachter (1974)は第二言語習得において、産出された内容だけではなく、回避された内容についても検討するべきだと述べ、第二言語学習者の産出に回避現象が見られると主張した。回避現象は様々な言語形式において起きていると考えられるが、その原因は言語間と言語内の両方にあると考えられる(Kamimoto et al. 1992; Liao & Fukuya 2004)。Irujo (1993)と Laufer (2000)は第二言語慣用句の産出における回避現象について検討し、学習者の第一言語との類似度を回避の要因としてあげた。Irujo (1993: 205)は以下のように述べている。

This avoidance might be due to fear of not getting the idioms right, since learners know that idioms don't literally mean what they say. (学習者が慣用句の産出を回避する原因は、正しく使用できないことを恐れ、慣用句が文字通りの意味を表していないのを知っていることにあると考えられる。)

「足を引っ張る」が「邪魔をする」の意味を表すように、慣用句は全体でまとまった意味を持つ(宮地 1985)という点において特徴的であり、学習者にとって特殊な表現形式であると考えられる。そのため、第二言語学習者の産出において慣用句表現が回避される可能性も十分考えられる。しかし、従来の習得研究においては、慣用句の回避現象に関するものは少なく、第二言語慣用句に関する回避の実態、また回避に関わる要因は十分に明らかにされていない。

そこで、本稿では第二言語習得における慣用句の回避現象を中心に、母語話者の産出と比較することによって、学習者が慣用句を回避しているか否かについて検討し、学習者の第一言語との類似度の視点から回避現象の要因を探る。

## 2 先行研究と問題点

### 2.1 「回避」の定義

言語項目に関する回避の問題は第二言語習得の研究において一つの課題とされている。回避の定義はある程度定着しており、個別現象の研究においても、言語研究全般の枠組みから見ても大きな揺れは見られない。授受行為と被害の場面を対象にした棚橋 (1994: 117) は、回避を「ある場面でほとんどの日本語母語話者が使用する言語形式が学習者の発話の中に現れてこないという現象」と定義している。また、Li (1996: 172) は英語における関係節を対象にし、以下のように回避を定義した。

Thus, we can define what Schachter called ‘avoidance’ as a situation when a second language learner knows the existence of the rules of a certain structure but is not sure about the details, and therefore when there is a need to use this structure, he/she tries to use another structure or other structures to serve the same or similar communicative purpose. (Schachter が言う「回避」は、第二言語学習者がある言語構造の存在を知っているにも拘わらず、細部に関して自信がないため、当該構造を使用する必要のある際に、他の構造を用いてコミュニケーション上の目的を達成することと定義できる。)

一方、英語慣用句を研究対象とした Laufer (2000: 186) では、言語間の回避現象はコミュニケーションにおいて問題が生じた際にその問題を解決するために用いられる学習者ストラテジーの一種であり、学習者が話し言葉または書き言葉において、ある表現の代わりにより安全と感じる他の表現を用いる現象であると定義されている。

本稿は以上の先行研究を踏まえ、回避を「言語産出に問題が生じた際に、その問題を解決するために用いられる学習者ストラテジーの一種であり、ある場面において、学習者は

間違いが起こらないように、ある自信のない表現形式の代わりに代用形式を用いるため、母語話者の産出と比べるとその表現の産出が少なくなる現象である」と定義する。

## 2.2 慣用句の回避に関する研究とその問題点

第二言語慣用句の回避現象に関する先行研究は主に Irujo (1993)と Laufer (2000)が挙げられる。この 2 つの研究には共通点が見られ、いずれの研究も学習者の第一言語を要因として回避現象について検討している。以下ではそれぞれの研究を紹介し、問題点を指摘する。

Irujo (1993)はスペイン語を第一言語としている上級英語学習者 12 人を対象に、第一言語との類似度・使用頻度・透明度の 3 つの要因に着目し、翻訳テストを用いて慣用句の回避現象について実験を行った。英語慣用句はスペイン語慣用句との類似度によって 3 つのグループに分けられる<sup>1</sup>。いずれのグループに入っている英語慣用句も、それと同じ意味を表すスペイン語慣用句が存在するが、グループ 1 は両者の表面形式が完全に一致するもの、グループ 2 は表面形式が部分的に類似しているもの、グループ 3 は表面形式が全く異なるものである<sup>2</sup>。翻訳テストは慣用句が含まれているスペイン語で書かれた段落を英語に訳すテストである。結果として、3 分の 2 の回答に慣用句の使用が見られ、学習者は慣用句の使用を回避しなかったと言える。また、グループ 1 の慣用句はグループ 2 とグループ 3 に比べ産出されやすく<sup>3</sup>、グループ 2 の英語慣用句は最も第一言語の負の影響を受けやすいことが分かった。更に、使用頻度と慣用句透明度を比べると、第一言語との類似度がより慣用句の産出に影響を与えていることが指摘された。

Laufer (2000)はヘブライ語を第一言語とする英語学習者 56 人を対象に、ヘブライ語慣用句との類似度の観点から英語慣用句を 4 つのグループに分類して調査を行った。その際、文完成テストを用いて慣用句の産出を検討し、慣用句知識テストを用いて英語慣用句が既知であることを確認した。慣用句のグループ分けに関して、Laufer (2000)は Irujo (1993)と同様に表面形式と慣用句の意味を基準に用いた上で、慣用句の概念分布を新たな基準として提示した。慣用句の概念分布というのは、ある意味を表すために慣用句表現が存在するか否かを示す分布のことである。そのため、Irujo (1993)における 3 つのグループに加えて

<sup>1</sup> Irujo (1993)において使用された慣用句項目と実験文は Irujo (1986)と同じものである(Irujo 1993: 208)。

<sup>2</sup> グループ 1 の例は英語慣用句の *point of view* が挙げられ、スペイン語慣用句の *punto de vista* (*point of view*)と完全に一致するとされている。グループ 2 の一例は *to lend a hand* である。スペイン語慣用句  *echar una mano* (*to give a hand*)と部分的に類似している。グループ 3 の例には *to pull his leg* があり、スペイン語表現の *tomarle el pelo* (*to take to him the hair*)と全く異なる形式を持っている(Irujo 1993: 302-303)。

<sup>3</sup> この結果に関して、統計的手法が用いられていないため、グループ 1 とグループ 2・グループ 3 の間に有意差があるか否かについては述べられていない。

もう 1 つのグループが用いられ、英語慣用句が表す意味と同義であるヘブライ語慣用句が存在しない場合、それらの英語慣用句はグループ 4 とされている<sup>4</sup>。実験の結果から、慣用句は 1 つのカテゴリとして回避されていないことが分かった。また、各グループにおける慣用句の回避率からみて、 $(1=3) < 4 < 2$  という結果が得られた。言い換えれば、グループ 1 とグループ 3 の慣用句はグループ 4 の慣用句より有意に多く産出され、またグループ 4 の慣用句はグループ 2 の慣用句より有意に多く産出されたことが分かった。更にグループ 2 とグループ 4 の慣用句に回避現象が見られた。

上記の 2 つの研究は、第一言語の慣用句との類似度を形式・意味の枠組みにおいて捉え、類似度が第二言語の慣用句の回避現象にどう影響を与えるのかについて考察したという点では評価されるが、共通の問題点が見られる。まずは実験の方法について、Irujo (1993)は翻訳テストを用い、Laufer (2000)は文完成テストを用いたが、いずれもテストの際に実験対象となる第二言語慣用句と同義である第一言語慣用句を示していることに問題があると考えられる。なぜならば、テストにおいて第二言語を産出する際に、協力者は自然に第一言語を参照し、場合によっては第一言語の慣用句を直接第二言語に翻訳した可能性もあり、第一言語の影響を受けやすいと考えられるからである。次に、それぞれの実験で用いられた文脈における英語母語話者の慣用句産出に関する説明が不十分であったことが挙げられる。慣用句と同じ意味を表す他の表現形式も存在するため、実験文において母語話者ならどれくらいの慣用句を産出するかについても検討する必要がある。従って、母語話者の産出データを取って学習者データと比較した上で考察する必要があると考えられる。

また、Irujo (1993)において慣用句の知識がテストされていなかったことも問題である。これは言い換えれば、実験で用いられた英語慣用句が協力者にとって既知のものであるか否かは検証されていないということである。上級学習者とはいえ、必ずしも全ての慣用句を事前から知っていたとは限らない。もし未知の慣用句があった場合、慣用句の非用は回避の問題ではなく、知識不足の問題となる。この点に関して、Laufer (2000)は慣用句の知識テストを行ったが、単に英語慣用句を翻訳するというテスト方法で知識を確認するのは不十分である。なぜならば、文完成テストにおいて協力者は同じ意味を表すヘブライ語慣用句を既に見ているからである。また、慣用句の意味に関して、第二言語慣用句と第一言

<sup>4</sup> Laufer (2000: 188)において、英語慣用句の *lay the cards on the table* はヘブライ語慣用句の *lasim et ha-klafim al ha-shulxan* と形式的に完全に一致するため、グループ 1 の例として挙げられている。また、英語における *miss the boat* はヘブライ語において *miss the train* と表現されるため、グループ 2 に分類された。グループ 3 に含まれている英語慣用句の *to take someone for a ride* はヘブライ語で表現すると *to work on someone* という形式になる。グループ 4 に関して、英語慣用句の *it's not my cup of tea* はヘブライ語において同じ意味を文字通りに表現するしかないと言われた。

語慣用句を同義と定義する際の基準はいずれの先行研究においても明確でなかった点も問題である。

以上を踏まえ、第二言語習得における慣用句の回避現象と第一言語の影響について更に検討する必要があると考えられる。そこで、本稿では先行研究と以上に挙げた問題点に基づき、以下の 2 つの目的を立て、実験を行った。

- 1) 母語話者の産出と比較することによって、上級学習者は第二言語を産出する際に慣用句を回避するか否かを明らかにする。
- 2) 選択テストを用いることによって、第一言語慣用句との類似度が慣用句の使用に影響を与えるか否かについて検討する。

### 3 本稿の仮説と実験方法

#### 3.1 本稿の仮説

Irujo (1993)と Laufer (2000)において、慣用句というカテゴリ全体は回避されていないと述べられているが、協力者がテストに用いられた第一言語に書かれている慣用句の影響を受け、直訳として英語慣用句を産出しやすくなった可能性が考えられる。また、先行研究において第一言語慣用句との類似度が慣用句の産出に影響を与えているという結果があげられたが、1.2 節で述べたように、その結果は実験の方法によって生じた差である可能性がある。つまり、Irujo (1993)において、グループ 2 の慣用句が第一言語の負の影響を最も受けやすいという結果が出たのは、第一言語に書かれている慣用句を英語に直訳したためであると考えられる。また、Laufer (2000)の場合も同じ問題が考えられる。回避に関わる要因について、Liao & Fukuya (2004)は第二言語学習者の言語発達過程を視野に入れ、回避は第二言語学習者の言語能力に影響されると考察し、言語能力が上達するに連れ、回避は少なくなると述べている。その結果に基づき、今後の課題として、第一言語との相違は中級レベルの学習者による句動詞の回避に影響するが、学習者の第二言語レベルが上達するに連れ、その影響が消えていくという予測を立てた。つまり、上級レベルに達した第二言語学習者にとって、第一言語の影響は弱くなると予測できる。本稿では、先行研究と異なり、学習者の第一言語の慣用句を示さずに協力者に文脈を完成してもらった選択式のテスト方法を用いるため、協力者が第一言語慣用句を直訳する可能性が低くなり、テストによる直接的な第一言語の影響を防ぐと考えられる。そこで、本稿では以下の 2 つの仮説を立てる。

仮説 1 上級学習者と母語話者の産出には差が見られ、第二言語学習者は慣用句を回避する。

仮説 2 各グループの慣用句の産出には差が見られず、第一言語との類似度は上級学習者の慣用句産出に影響を与えない。

なお、本稿では中国人上級日本語学習者を対象に実験を行う。日本語と中国語の慣用句表現には類似するものが多いため、第一言語慣用句と第二言語慣用句との類似度の影響を調べる際の対象として、日中慣用句は相応しいと言える。

## 3.2 実験方法

### 3.2.1 実験協力者

本実験の最初に、日本語母語話者 22 名及び中国人上級日本語学習者 23 名を募集し実験を行なったが、結果分析に使用できないデータがあったため<sup>5</sup>、2 つのグループに属する 3 名ずつのデータを外した。そのため、実際に得られたデータは日本語母語話者 19 名と中国人上級日本語学習者 20 名、合計 39 名分である。日本語母語話者は 19 歳～27 歳の筑波大学大学生・大学院生である。中国人上級日本語学習者は 19～27 歳で、日本語能力試験 N1(または旧 1 級)に合格し、留学経験のある(滞在時間 1 年以上)筑波大学大学生・大学院生である。

### 3.2.2 実験アンケート

#### 3.2.2.1 慣用句

本稿では、表 1 が示すように、表現の分布・表面形式の対応関係・意味的対応関係の 3 つの要因に基づいて、16 語の日本語慣用句<sup>6</sup>を選出し、それぞれを 4 つのグループに分類した。

<sup>5</sup> 以下では分析から外したデータに関して解説する。まずは産出テストにおいて、日本語母語話者 1 人と中国人学習者 2 人がある設問を回答する際にダミーの選択肢を選んだため、当該設問において文脈を正しく理解できなかったと判断し、当該協力者の回答を採用しないことにした。また、慣用句の認知度テストにおいて、日本語母語話者 1 人と中国人学習者 1 人に未知の慣用句があったため、その 2 人のデータも分析から外した。もう 1 人の日本語母語話者は認知度テストにおいて回答漏れがあったため、慣用句知識に関しては確認できず、分析から外した。ダミー選択肢に関する具体的な説明及び認知度調査の分析に関しては 2.2.2.2 節と 3 節を参照されたい。

<sup>6</sup> 本稿は宮地 (1985)・村木 (1985)・石田 (2004)を参照に、日本語慣用句を「二語以上から構成され、構成成分の結びつきが固定しており、全体でまとまった意味を表す表現である」と定義する。しかし、慣用句の固定性には度合いがあり(石田 2004)、個々の慣用句に関しては研究者によって判断が異なる場合がある。

表 1 中国語表現との対応関係による日本語慣用句の分類

	表現の分布(対象となる日本語慣用句と意味的に対応する中国語慣用句が存在するか否か)	表面形式の対応関係	意味的対応関係
グループ 1(4 個)	○	○	○
グループ 2(4 個)	○	△	○
グループ 3(4 個)	○	×	○
グループ 4(4 個)	×	×	○ <sup>7</sup>

それぞれのグループの特徴及びその中に含まれる日本語慣用句は以下の通りである<sup>8</sup>。

グループ 1 実験文脈において中国語慣用句と形式的に対応し、意味的にも対応する日本語慣用句<sup>9</sup>。

(全力を尽くす/足を引っ張る/耳を傾ける/首を長くして待つ)

グループ 2 実験文脈において、中国語慣用句と形式から見て部分的に類似し、意味的に対応する日本語慣用句。

(目に入る/気が短い/口を揃える/大目に見る)

グループ 3 実験文脈において、中国語慣用句と形式的に異なり、意味的に対応する日本語慣用句。

(頭に来る/首にする/馬鹿にする/腹が立つ)

グループ 4 実験文脈において意味的に対応する中国語慣用句が存在しない日本語慣用句。言い換えれば、文脈において中国語では日本語慣用句と同じ意味を表現するために慣用句以外の形式を用いなければならない。

(気に入る/気が変わる/口にする<sup>10</sup>/気にする)

それぞれの日本語慣用句と中国語慣用句との対応関係は 3 人の中国人上級日本語学習者

<sup>7</sup> グループ 4 において、日本語慣用句と中国語の慣用句以外の形式が意味的には対応しているため、○をつけている。

<sup>8</sup> 日本語慣用句と対応する中国語表現は付録を参照されたい。

<sup>9</sup> 形式的な対応については、中国語慣用句が対応する日本語慣用句の構成成分をすべて包含した上で余剰の部分がある場合も同形式として扱う。例：耳を傾ける 側耳傾聴(傾ける 耳 聞く)

<sup>10</sup> 「口にする」は食べるという意味と話すという意味を両方表せるが、ここでの実験文脈においては食べる意味を示すものとして用いる。

(筆者を含む)と 1 人の日本人中国語学習者によって確認された。また、本実験では上級学習者が知っている可能性の高い慣用句のみを使用したため、事前調査として 5 人の中国人上級日本語学習者を対象に 4 段階評価の認知度テストを行った。結果として、16 個の慣用句それぞれの認知度の平均は 2 以上であったため、上級学習者が見聞きしている可能性が高いことが分かり、これらを全て実験に用いた。

### 3.2.2.2 産出テストと認知度調査

本実験では、慣用句産出テストと認知度調査を順番に行った。前者は慣用句産出のデータを収集するためのテストであり、後者は慣用句が既知であるか否かを確認するためのテストである。

1.2 節で述べたように、Irujo (1993)と Laufer (2000)において用いられた翻訳テストと文完成テストにはいくつかの問題があると考えられる。まず、第一言語慣用句の提示は産出プロセスに影響を与える可能性がある。また、文を完成させる際に、協力者が対象となる慣用句を思い出せない可能性もあるため、その場合慣用句が産出されなかった原因は回避の問題ではなくなってしまうという問題もある。

従って、本稿では先行研究の問題点を踏まえ、選択形式の産出テストを用いた。協力者は文脈を読んだ上で、4 つの選択肢の中から 1 つを選んで文を完成させるよう指示されており、その際に産出される日本語の表現を分析対象とする。(1)は産出テストの 1 例である。

(1) 一人暮らしをしている友人に何か食べるものでも送りたいと思っています。外食が多く、食生活が不安定なことに加えて、ひそかに体重が増えるのを  
そです。どういものを送れば喜ばれるでしょうか。

A 気にしている B 大切に感じている C 心に留めている D 不安に思っている

例(1)において、回答 A と D は同じ意味を表しており、いずれも文脈に相応しい回答と考えられるが、「不安に思う」は文字通りの意味を表す一般的表現であるのに対し、「気にする」は文字通りの意味を表さない慣用句表現である。回答 B と C は意味的に間違っている回答である。協力者には「自分が一番入れたい答えを 1 つのみ選んでください」と指示した。テストに使用される 4 つの選択肢は以下の基準に基づいて作られた。

選択肢 1 : 文脈に相応しい慣用句

選択肢 2 : 文脈に相応しい慣用句でない表現

選択肢 3 : 文脈に相応しくない慣用句(一部の構成要素は選択 1 と意味的に関連する)

選択肢 4 : 文脈に相応しくない慣用句でない表現(一部の構成要素は選択肢 2 と意味的に関連する)

選択肢 3 と 4 は協力者に文脈の意味をよく理解してもらうために作ったダミーであり、各設問における選択肢の順番はランダムに決められている。

実験文の作成は以下の手順で行った。まず『慣用句の意味と用法』の付録に掲載されている常用慣用句一覧と『三省堂ことわざの辞典』から対象となる日本語慣用句を選出した。現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ(中納言)において個々の慣用句が用いられている適切<sup>11</sup>な文脈を抽出して、必要に応じて文脈に手を加えた上で16文の実験文を作成した。更に、実験の目的を隠すために、ダミーとして日本語能力試験 N1・N2 の語彙リストから10語の動詞を選出し、慣用句の実験文と同じ方法でダミー文とその選択肢を作成した。テストに用いられた文の順番はランダムである。それぞれの文脈と選択肢の妥当性は日本語母語話者3名が確認している。

また、産出テストに続けて行った認知度調査は、協力者が全ての慣用句を知っているか否かを確認するためのものである。例(2)は認知度調査の一例である。

(2) 「気にする」

1	2	3	4
一回も聞いた/見たことがない			よく聞く/見る
「気にする」: _____			

認知度調査においてはまず、協力者にそれぞれの慣用句について見聞きしたことがあるかどうかについて4段階評価してもらい、それから空欄のところに慣用句の意味を簡単に説明するように指示した。その結果に基づいて慣用句の知識を確認した。

### 3.2.3 実験手順

本実験は2014年12月～2015年1月の期間において、筑波大学中央図書館にあるセミナ

<sup>11</sup> コーパスから文脈を選出する際には、文脈の長さや難易度を日本語文章難易度判別システム(<http://readability.net/>)を用いて、文字数を95前後に統一でき、難易度が中級前半～上級前半と判断される文脈を適切だと判断した。

一室内で実施した。協力者と筆者が 1 対 1 の環境において実験を行った場合もあれば、複数の協力者が同時に実験に参加する場合もあった。複数の協力者を対象とする際に、お互いが影響を与えてしまうことを防ぐために、隣席に座らないよう指示した。実験の手順は以下の通りである。まず実験全体の流れについての説明を行った後、実験の第一段階である産出テストを行った。協力者には産出テストの説明用紙を読ませ、読み終わったのを見計らって産出テストの用紙を配布し時間の制限をかけずに回答させた。次に、実験の第二段階である認知度調査を行った。協力者には同様に認知度調査の説明用紙を読ませ、その後回答用紙を与えて回答させた。最後に、協力者の情報確認シートを回答させた。学習者と母語話者を対象に行ったテストは同じ内容のものであるが、学習者の説明文には第一言語である中国語を用いた。以下の表 2 は実験手順をまとめた表である。

表 2 本実験の手順

協力者	本実験
日本語母語話者/中国人 上級日本語学習者	全体の説明→第 1 段階の産出テストの説明→慣用句産出テスト→第 2 段階の認知度調査の説明 →認知度調査→情報確認シート

#### 4 結果と分析

まず、得られた結果を分析するための手法について述べる。分析から外したデータについて述べると、産出テストにおいて、選択肢 3 と選択肢 4 はダミーであるため、協力者がいずれかを選んだ場合、当該設問において文脈を正しく理解できなかったと判断し、回答を採用しなかった。また、回答結果のコード化については、各設問において、選択肢 1(慣用句)を回答として選んだ場合、その回答のコードとして 1 を、選択肢 2(一般的表現)を選んだ場合、0 をつけた。認知度調査に関しては、4 段階自己評価において 1 を選んだ場合にはその慣用句を「未知」とであると判断し、その協力者の回答を最終の分析から外した。2 以上を選んだ協力者が書いた意味解釈は以下の 3 種類に分類することができる<sup>12</sup>。

種類 1 : 「辞書<sup>13</sup>に書いてある意味と完全に異なる」

例 : 「頭に来る」 : 注意到 (気がつく)

種類 2 : 「辞書に書いてある意味と完全には一致しないが、部分的に一致している」

例 : 「気が変わる」 : 性子变了 (気性が変わった)

<sup>12</sup> 筆者ともう 1 人の中国人日本語上級学習者がこれを判断した。

<sup>13</sup> 辞書として『デジタル大辞泉』(小学館)を使用した。

種類 3 : 「辞書の意味と完全に一致する」

例 : 「腹が立つ」 : 生气 (怒る)

種類 1 に相当する回答を行っている場合は、協力者が自己評価において 2 以上を選択したとしても、自己評価が 1 である協力者と同様にその慣用句を「未知」と判断した。慣用句の意味を知っていると判断するのは種類 2 と 3 の回答を行った協力者のみである。

最終分析には 19 名の日本語母語話者データと 20 名の中国人上級日本語学習者のデータが用いた。分析の際は二項ロジスティック回帰分析<sup>14</sup>を使用し、ロジスティック回帰モデルの構築には、産出テストの回答(慣用句 1/一般的表現 0)を目的変数として、強制投入法を用いて、協力者の第一言語(日/中)・慣用句の種類(グループ 1・2・3・4)・慣用句の認知度(認知度 2・3・4)・慣用句の類似度と第一言語の交互作用を共変量として解析を行なった。4 つの共変量の中で、協力者の第一言語と慣用句の種類はカテゴリ共変量として分析を行い、パーシャル法を用いた。対比指標の参照カテゴリを最後にした。各変数の回答への影響は表 3 に見る通りである。

表 3 二項ロジスティック回帰分析の結果

説明変数	回帰変数 B	標準 誤差	有意確 率	Exp(B)	Exp(B)の 95%信頼区間	
					下限	上限
第一言語(1)	-0.35	0.429	0.935	0.966	0.417	2.238
慣用句の類似度			0.229			
慣用句の類似度(1)	0.643	0.472	0.173	1.903	0.754	4.802
慣用句の類似度(2)	-0.279	0.409	0.495	0.757	0.340	1.686
慣用句の類似度(3)	0.173	0.439	0.693	1.189	0.503	2.808
慣用句の類似度*第一 言語			0.109			
慣用句の認知度	0.500	0.177	0.005	1.649	1.166	2.331
定数	-0.574	0.740	0.438	0.563		

構築したロジスティック回帰モデルは、モデルの適合度を示す Hosmer と Lemeshow 検

<sup>14</sup> 分析ツールは SPSS22.0 を使用した。

定において  $p>0.05$  という結果を示し、適合していると言える。表 3 から分かるように、母語が回答に与える影響は有意ではなく、日本語母語話者と日本語学習者の慣用句の産出傾向に違いは見られなかった。また、慣用句の類似度が結果に及ぼす影響も有意でなかった。言い換えれば、グループ 1~グループ 4 の慣用句の産出傾向に違いは見られなかったということである。慣用句の類似度と協力者の母語の交互作用の有意確率は 0.05 を上回り、有意ではない。それに対して、慣用句の認知度が回答に与える影響は有意確率 0.005 で、有意水準 1% より小さいため、慣用句の産出に影響していると言える。

## 5 考察

### 5.1 仮説 1

本稿の仮説 1 を以下に再掲する。

仮説 1 上級学習者と母語話者の産出には差が見られ、第二言語学習者は慣用句を回避する。

表 3 で示したように、第一言語という変数は産出テストの結果に影響を与えなかった。つまり、同じ文脈において慣用句表現を選ぶか、または一般的表現を選ぶかを比較した結果、母語による違いは見られなかったということである。従って、学習者は産出テストにおいて慣用句という表現形式を回避しているとは言えない。また、慣用句の類似度と協力者の母語の間に交互作用がなかったことから、第一言語との類似度に関わらず、中国人日本語学習者は日本語母語話者と同じように慣用句を産出することができると言える。従って、「学習者は慣用句を回避する」という仮説 1 は本稿において証明されなかった。

学習者が慣用句を回避しないという結果は Irujo (1993) と Laufer (2000) の研究結果と一致する。つまり、第二言語上級学習者は母語話者と同じように多くの慣用句を産出することができると考えられる。一方、Laufer (2000) の分析と本稿が異なるのは、グループ 2 とグループ 4 のいずれのグループにおいても回避現象が起こっていないという点である。

学習者が慣用句を回避しないという結果の原因としては以下の 4 つのことが考えられる。一点目、慣用句は文字通りの意味を表さないため、学習者がそれを第二言語における特徴的な表現形式と認識し、自分の表現を豊かにするために積極的に産出するという意識を持っている可能性がある。二点目、研究対象とされている表現形式が異なるが、Liao & Fukuya (2004) が述べているように、回避は第二言語学習者の言語能力に影響されると考えられ、第二言語の国に留学経験のある上級学習者には回避の減少が見られる。その理由としては、留学経験のある中国人上級学習者は日常生活において慣用句に触れる機会が多く、慣用句表現を日本語らしい表現形式と認識していることが考えられる。

三点目、実際には学習者が慣用句を回避しているにもかかわらず、今回の実験ではそれが現れなかった可能性もある。回避の定義から考えて、「学習者が間違いが起こらないよう

にある表現をあえて使用しないことにする」というのは、学習者がある特定の表現形式を回避する場合、自分にとってより安全な代用形式、つまり産出する際により自信のある表現を用いるということである。しかし、今回の実験において、学習者にとって慣用句の代わりに使用できる代用形式は筆者によって作られた選択肢のみである。そうした時に、慣用句表現と比べ、筆者が提示した選択肢の中の一般的表現は学習者にとってより安全とは感じられず、学習者にとっては代用表現にならないために慣用句の産出が促された可能性がある。四点目、今回の実験は特に時間制限を設定しなかったため、協力者は選択肢に対して様々な比較をしてしまう可能性もある。その際には、実験の目的が慣用句表現にあるということを協力者に予測されることが考えられ、協力者は日常産出と同じような自然な第二言語産出ができず、予測した実験の目的に合わせて回答を選ぶことになってしまう。

## 5.2 仮説 2

本稿の仮説 2 は以下の通りである。

仮説 2 各グループの慣用句の産出に差が見られず、第一言語との類似度は上級学習者の慣用句産出に影響を与えない。

表 3 で示しているように、慣用句の類似度は産出テストの結果に影響を与えない。つまり、日本語慣用句と中国語慣用句との類似度に拘わらず、慣用句産出において中国人上級日本語学習者は日本語母語話者と同じ傾向を示す。従って、第一言語との類似度は上級学習者の慣用句産出に影響を与えないという仮説 2 は今回の実験によって検証された。

Irujo (1993)と Laufer (2000)による実験では、協力者は第一言語で書いてある慣用句を見ることによって、記憶に潜んでいる第二言語の慣用句の知識が喚起され、より積極的に母語の知識を使用して慣用句を産出したと考えられる。そのために、第一言語と最も類似する慣用句が最も多く産出され、部分的に類似する慣用句には第一言語の負の影響が最も大きかったという結果が見られた。本稿が行った実験においては第一言語の慣用句を示さなかったため、学習者はテストの内容から直接第一言語慣用句に関する情報を得ることが不可能となり、脳内の知識を参照しなければならなかったと考えられる。その結果として、慣用句の産出プロセスにおいて学習者第一言語の影響は見られなかった。つまり、第二言語慣用句の産出において、上級学習者は第一言語を介して慣用句を産出していないと考えられる。この結果は、Liao & Fukuya (2004)の最後に述べられた、第二言語学習者のレベルが上級に達した場合、第一言語が回避に与える影響はなくなるという予測に一致していると言える。そこで、上級学習者の回避現象を探る際には、第一言語の要因より他の要因を考えなければならない。

### 5.3 慣用句の認知度

本稿の結果分析から分かるように、慣用句の認知度が慣用句産出に与える影響は有意であり、学習者と母語話者全体において、慣用句は認知度が高いほど産出されやすいと考えられる。慣用句の認知度が回避に影響を与える理由として、ある表現形式の認知度が高ければ高いほど、当該表現形式がレキシコンにより深く刻みこまれ、産出する際により思い出しやすくなることが考えられる。また、回避の原因を考えてみると、ある表現形式に対する自信が欠けていることが回避を引き起こすため、第二言語学習者は一度しか見聞きしなかった表現より毎日見聞きするもののほうに自信を持っていると考えられ、認知度の高い表現をより多く産出する。従って、認知度の高い慣用句は第二言語の産出プロセスを促進すると考えられる。

一方、Irujo (1993)は、慣用句の使用頻度と慣用句の産出の間に相関関係が見られないという結果を報告している。使用頻度はある表現がどれくらい使用されているかを示し、表現の馴染み深さを表す認知度と異なる概念であるが、使用頻度の高い表現は低い表現より馴染みが深いと考えられるため、2つの概念は対立的なものではなく、類似していると思われる(Liu 2008: 77-78)。Irujo (1993)において使用頻度と産出の相関関係が見られなかった原因として、使用頻度調査の対象は英語母語話者であったため、慣用句産出の主体(学習者)と一致していないという問題点が考えられる。従って、これから慣用句の回避現象について更に検討する場合、回避に関する先行研究において十分に議論されて来なかった慣用句の認知度を新たな要因として考えなければならない。

## 6 おわりに

本稿では第一言語との類似度の観点から第二言語使用における慣用句の回避現象について仮説を立て、実験を行って検証した。結果として、中国人上級日本語学習者は慣用句を回避していないこと、また第一言語との類似度は慣用句の産出に影響を与えないことが分かった。さらに、学習者の慣用句認知度が産出に影響を与えることが検証された。

今後の課題として、より自然産出に近い産出テストの方法を用いて回避現象をさらに検討する必要がある。また、慣用句の認知度を回避の要因に入れる場合、認知度の定義についてはさらなる検討が必要ではないかと考えられる。本稿で用いられた慣用句認知度調査はNippold & Rudzinski (1993)とNippold & Taylor (2002)の認知度テストを参照したものであり、協力者が普段どのような頻度でそれぞれの慣用句を見聞きしているかを自己報告の形式で判断した。この調査方法には2つの問題点があると考えられる。まずは、見聞きを強調しているため、協力者はインプットのプロセスのみにおいて記憶を探り、アウトプットのプロセスにおいてどのくらいの頻度でそれぞれの慣用句を使用しているかを無視してしまう恐れがある。そして、4段階評価による自己評価は協力者の個人差によって影響される。そこで、認知度を語彙の使用・理解の総合的な視点から判断し、より精確なテストを作る必要があると考えられる。今後は、慣用句の認知度をより精確に定義し、言語間要因

以外の要因を分析に入れ、慣用句認知度・透明度の観点から回避現象について考えていきたい。

### 参考文献

- 石田プリシラ (2004) 「動詞慣用句の意味的固定性を計る方法: 統語的操作を手段として」 『國語學』 55(4): 42-56.
- 三省堂書店編修所 (1991) 『三省堂ことわざの辞典』 三省堂.
- 棚橋明美 (1994) 「英語を母語とする日本語学習者における『非用』: 授受行為と被害の場面をてがかりとして」 『人間文化研究年報』 18: 117-125, お茶の水女子大学人間文化研究科.
- 宮地裕 (編) (1982) 『慣用句の意味と用法』 明治書院.
- 宮地裕 (1985) 「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」 『日本語学』 1: 62-75.
- 村木新次郎 (1985) 「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」 『日本語学』 4(1): 15-27.
- Cooper, T. C. (1999) Processing of idioms by L2 learners of English. *Tesol Quarterly* 33 (2): 233-262.
- Irujo, S. (1986) Don't put your leg in your mouth: Transfer in the acquisition of idioms in a second language. *Tesol Quarterly* 20 (2): 287-304.
- Irujo, S. (1993) Steering clear: Avoidance in the production of idioms. *Iral-International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* 31 (3): 205-220.
- Kamimoto, T., Shimura, A. & Kellerman, E. (1992) A second language classic reconsidered: The case of Schachter's avoidance. *Second Language Research* 8 (3): 251-277.
- Laufer, B. (2000) Avoidance of idioms in a second language: The effect of L1-L2 degree of similarity. *Studia Linguistica* 54 (2): 186-196.
- Li, J. (1996) Underproduction does not necessarily mean avoidance: Investigation of underproduction using Chinese ESL learners. In: L. F. Bouton (Ed.), *Pragmatics and language learning* Vol. 7: 171-187.
- Liao, Y. & Fukuya, Y. J. (2004) Avoidance of phrasal verbs: The case of Chinese learners of English. *Language Learning* 54 (2): 193-226.
- Liu, D. (2008) *Idioms: Description, comprehension, acquisition, and pedagogy*. New York: Routledge.
- Nippold, M. A. & Rudzinski, M. (1993) Familiarity and Transparency in Idiom Explanation A Developmental Study of Children and Adolescents. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research* 36 (4): 728-737.
- Nippold, M. A. & Taylor, C. L. (2002) Judgments of Idiom Familiarity and Transparency A Comparison of Children and Adolescents. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research* 45 (2): 384-391.
- Schachter, J. (1974) An Error in Error Analysis. *Language Learning* 24 (2): 205-214.
- (陳雯 筑波大学大学院生 [yohilly@yahoo.co.jp](mailto:yohilly@yahoo.co.jp))

付録 日中慣用句の分類

	日本語	中国語
グループ 1	全力を尽くす	竭尽全力(全力を尽くす)
	足を引っ張る	拖后腿(足を引っ張る)
	耳を傾ける	侧耳倾听(耳を傾けて聞く)
	首を長くして待つ	翘首以待(首を長くして待つ)
グループ 2	目に入る	映入眼帘(見る)
	気が短い	沉不住气(短気)
	口を揃える	异口同声(口を揃える)
	大目に見る	睁一只眼闭一只眼(大目に見る)
グループ 3	頭に来る	火冒三丈(怒る)
	首にする	炒鱿鱼(首になる)
	馬鹿にする	看不起(軽蔑する)
	腹が立つ	火冒三丈(怒る)
グループ 4	気に入る	喜欢(好き)
	気が変わる	改变主意(考え方を変える)
	口にする	吃(食べる)
	気にする	在意(気にする)

# Avoidance of Idioms in Second Language Production: Effect of The degree of L1-L2 Idiom Similarity

CHEN Wen

This study investigates whether avoidance of L2 (Japanese) idioms is determined by the degree of similarity to their L1 (Chinese) counterparts. Sixteen Japanese idioms were divided into four groups based on L1-L2 similarity. Twenty-two Japanese native speakers and 23 Chinese-speaking Japanese learners were tested on the 16 idioms (4 per group). All participants took a multiple-choice test and a familiarity test, in that order. The results showed that idioms were not avoided, and L1-L2 degree of similarity did not affect avoidance. However, familiarity of L2 idioms turned out to be a factor in idiom avoidance.